郷土室だより

第 56 号

昭和62年6月30日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電 話 543－9025

聞き書き――明治・大正

烟草屋のおばさんの話

廣瀬千香

おばさんからの話は、昭和四十五、六年頃の聞書きです。佃の時雨女史姉妹のことは、長谷川時雨著「渡りきらぬ橋」（『旧聞日本橋』）に、谷崎先生のお話は、『幼少時代』に委しく、笹沼さんの御恩は、生涯忘れない……と語ってゐられます。

昭和九年から、私は新富町に住みました。入船橋、築地橋、三吉橋、新富橋、桜橋……グルリを橋に囲まれたこの町の情緒を、こよなく愛し、四十年に渉って此処に居りました。烟草沸底の時代、行列に並んだのも、入船町のおばさんの店でした。大変な猫好きで、何時も膝の上に猫をのせてゐました。私が始めて猫を飼はうとした時、オフンシのこと、食べものの事、猫学の凡てを、おばさんから伝授されました。

も早、おばさんも烟草屋さんもなくなりました。佃の渡しも、今はなく、大川（隅田川）だけが滔々と流れてゐます。

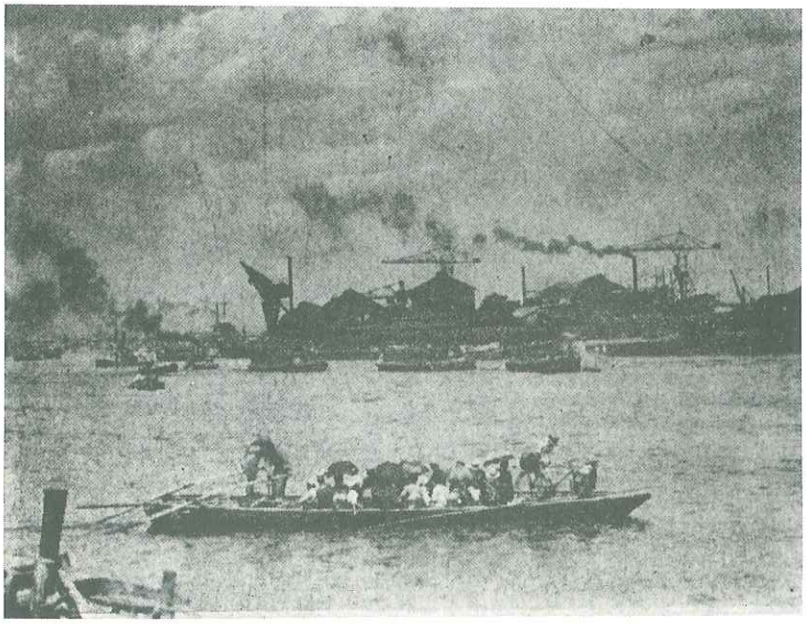
○佃生れ

おぢいさん（細川源二郎）は佃の生えぬきでした。大正九年亡くなり、今年五十年忌になります。算盤の上手な人でした。その頃まだ小学校が一つもなかったので、みんなが明きめくらでは困るから、と発起人になって、区役所へ願ひ出て、やっと小学校をつくってもらったさうです。草川原の真中に建てられて、先生は一人だったさうです。明治の初めの佃は、草ボウ〳〵の原ッパが沢山ありました。

佃の渡しを渡って、明石町や湊町へ行くのでしたが、小さい川や橋がありました。私の子供の頃、年寄りからカッパやかはうそその話は、よく聞かされました。

（祖母の話）水の近くだから、時々カッパやかはうそが出て、人をばかしたり悪戯をしたといひます。渡し場に近ドブ川や橋のある道を、夕方、おかもちの中に魚を入れて知合ひの家へ持っていってやらうと、小橋の所へ来かかると、急に眼の前に大きな山が出来て、前へ行けなくなっちゃって、泣き出しさうになって、

「おこうさーん」と、おばさんの名を呼んだけれど、原ッパがあるので、聞こえない。魚を一つつまんで、放って



佃の渡舟「京橋温故知新録　第一輯（昭和２年刊）」より

やると、ズボーンと川の中へ飛込む音がして、山が消えてしまった、っていふのです。かはうそは魚や女の髪の油の匂いが好きで、佃の辺には時々出たって話です。

私の父も、かはうその話をしました。湯屋の近くの道端に、おしるこ屋が出てゐたら、お客になってやって来て、食べちゃって、石ころを置いて川の中へベシーンと逃げちまった……なんて話も聞きました。

祖父（源二郎）は佃の九番地——渡し場のすぐ右へ入った角で、大寅といふ問屋をしてゐました。—漁夫がとってくる魚の小魚を塩水の樽に入れて、房州の方やアイノ浜や、方々へ卸す商買で、これは漁夫がエサに使ふのでした。

佃の渡し場がボン／＼蒸汽になったのは、後のことで、私の子供の時分には、昼は大船二はい（二人で漕ぐ）と、小舟が一ぱい（一人で漕ぐ）、都合三ばいの舟で渡してゐました。両岸に小さな小屋があって、おばあさんが番をしてゐて、一枚ずつ札をとって乗り込み、舟の中で籠へその札を入れるのでした。夜は番小屋に人がゐなくなるので、銭を舟の中で手渡しました。夜は舟の数も少なくなりました。料金は、昼五銭、夜は倍の十銭のように覚えてゐます。

22，3歳の頃の時雨（病中）
「旧聞日本橋（青蛙書房刊）」より

○時雨さんと春子さん

明治二十九年生れの私が、十才ばかりの頃、渡し場の近くで遊んでゐると毎日のように見かける娘さんが、長谷川時雨さんであると判りました。時雨さんは毎日渡しに乗ってお出かけで、妹の春子さんと姉妹二人連れといふことはなく、お姉さんは束髪の前髪を分けて結って、背の高い色白のべっぴんさんで、何時も地味な着物姿で、眼鏡をかけてゐました。妹さんは、紫の袴に靴、おさげ髪のお嬢さんでした。時雨さんは、どことなく様子のよい女で、たゞの娘さんではないと思ってゐましたら、この方が女の小説書きと判りました。それはお宅へ出入りしてゐたコーヤさん（染物屋）で私の伯母の家へよく来てゐたのから聞いて判ったのでした。

新佃の時雨さんのお宅は、池があって、よいお住ひでした。この辺では眼につく御姉妹でしたから、私はよく覚えてゐます。

私は月島の小学校へはいりましたが後に東劇の前の、今の松竹会館のある角にあった小学校へも、少し行きました。海老茶色の袴をはいて通ひました。

小さい頃は身体の弱いたちでしたので、おぢいさんにいはれて、ナニナタのお稽古にも、通ったことがありました。鉄砲州稲荷のそばに、その先生がゐました。それで、どうやら丈夫になりました。

○廿才前後

大正二年、十八の時、御奉公に出たのが、日本橋亀島町一丁目にあった偕楽園といふ大きな支邦料理のお店でした。御主人は笹沼源之助さんです。大勢の宴会も出来る百畳敷のお座敷や、小部屋もドッサリありました。お座敷女中が廿人ほどで、料理番は、中国人は一人もゐませんでしたが、下番を含めて十五人ばかり、お帳場さん二人、下足番三人ゐました。私は奥付きになりましたが、お針さんや御飯炊き、ばあやさん二人、小女など、随分大人数の家でした。

奥さんは私より三つほど年上でしたが、人形のように綺麗な方でした。旦那さんは、赤門（機械の方とか）を一番でお出になったといひ、かっぷくのいゝ、気さくな、親切な方でした。私はよい所へ上って大変幸せでした。奥向きでしたから、余計な気を使うこともなく、身の回りも、何一つ不自由なく、お米の値段さへも知らない、ごしょうらくな暮らしで通しました。夏は

何処の料理屋さんも客薄なので、塩原にあった別荘へ、四人づつ交代で、六日ほどづつ保養に出かけさせてもらひました。天狗岩の手前の、川っぷちで、結構な別荘でした。

向島にも別荘をお持ちでした。牛島小学校のそばで、庭にお稲荷さんがあって、祭の晩には、神楽やお囃子があって、近所の人たちを庭に入れて、おこわ（赤飯）を出しました。

お店は繁昌で、三百人を越す宴会が続き、大入りには、そばが皆に出る習ひでしたが、おそばも、度々で飽きてしまふので、お金で十五銭下さる時もありました。

お得意様は、大きな会社が多く、古川さん・浅野総一郎さん・大倉喜八郎さん（いづれも当時の大実業家）などで、時々お出前もしました。材料を車に積んで、若い者がハンテンで、コックやお座敷、下働きの人たちが、揃って出向きました。

旦那さんと赤門時代の同級の、帝国ホテルの犬丸さんとは、特に御懇意にしていらっしゃいました。旦那さんは東京の料理組合の会長をしてゐました。

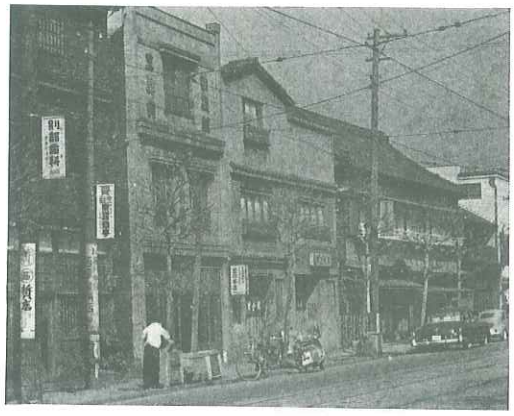
笹沼さんの奥さんは、神田の質店、大野さんの娘さんと聞ゐていました。お子さまは総一郎さんと、お嬢さん三人でしたが、お一人亡くなり、私はキミ子さんを、小学校へ送ったり、杵屋六左衛門さん宅へ、長唄のお稽古にお供をしました。小学校も杵屋さんも、茅場町のお薬師さんを通り抜けて行きました。

借楽園のお隣りに、橋爪さんといふお医者さんがあり、後にその方が移転して、角まで借楽園が使ふようになり

亀島町・借楽園付近（大正元年）

旧亀島町・現茅場町付近（昭和57年）
「中央区・住居表示新旧対照案内図」より

築地二丁目電車通り（昭和32年）



所へお泊めするわけにもいかないので、向島の別荘へお泊めしました。全く親身も及ばない親切さに、みな感心しました。

大正の大震災の時は、私たちは東京駅へ避難しました。この時を境に私は宿下りし、その後結婚して、築地で烟草屋を始めたのでした。有楽町駅から月島の工場へ通ふ労務者たちが、朝晩ぞろ〳〵通る路筋なので、店は繁昌しましたが、市場通りといふ広い道路が出来ることになって、替地を入船橋南詰にいただきました。

◆　◆　◆

○谷崎潤一郎さん

（笹沼さんは）蛎殻町におうちのあった谷崎さんとは、坂本小学校時代からの親友で、大学も一緒でした。潤一郎さんは、偕楽園を御自分の家のやうにしていらっしゃいました。私は夜おそくお夜食を拵らへては、お部屋へ持って行きました。おとなしい、いい方でした。

何年のことでしたか、大晦日に潤一郎さんは、もと芸者さんの奥さんと子供さんを連れて、転がり込んでいらっしゃいました。笹沼さんは商買柄、此

（同　著「旧聞日本橋」所収）

○谷崎潤一郎著　幼少時代

は、二冊とも当郷土資料室にあります。

また、長谷川・谷崎両氏に関する図書、佃島・日本橋など地域に関する図書もいくつかあります。これらのうちには貸し出しできるものもありますので、さらに深くお調べになりたい方はどうぞ御利用ください。

貸し出しを希望の場合には、自宅の住所が確認できるものをお持ちください。

今回のような聞き書きは、これから町の様子がどんどん変わっていく中で大変貴重なものになると思います。

これからも、機会があれば、このような企画を是非立ててゆきたいと思っております。昔の様子を知っている方がいなくならないうちに……。

また、最近のまちの様子でも構いません。変わった事などありましたら、参考にさせていただきたいので、郷土資料室まで御一報くだされば、幸いに存じます。

郷土資料室への直接のお電話は、次の番号でお願いいたします。

中央区役所　五四三―〇二一一
内線（六九一）

廣瀬千香女史御紹介

明治三十年・山梨生れ

山梨県立高女卒

中央区新富町に永年住んでいらっしゃいました。

主な著書

○山中共古ノート　第一～三集（青燈社）

○タウン誌「かんだ」随筆掲載はじめに出てきました図書

○長谷川時雨著　渡りきらぬ橋

次号（郷土室だより第57号）予告

ポートピア，16―江戸湊のなりたち

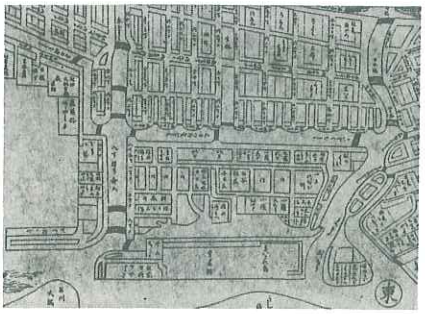
鈴木　理生氏著（都市史研究家）

去る五月二十三日に行われました、第五十一回、東京を語る会の講演内容にそって、先生に新たに書いていただきました。紙面では当日の雰囲気をそのままお伝えできないのが残念ですが先生のわかりやすく、興味深いお話にみなさんも、ついうなずいてしまう事でしょう。

当日いらっしゃれなかった方だけでなく、一度聞いた方にとっても、大変参考になるお話だと思っております。

どうぞ楽しみにしていてください。

なお、発行は九月十五日の予定です。



「武州古改江戸之図（承応二年）
東京市史稿　皇城篇附図」より